様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００１９１

研究課題名（和文）剥製美術の研究――近現代美術におけるヒトと動物の関係の諸問題

研究課題名（英文）Taxidermy in contemporary art : Study on the relationships between human and animals.

研究代表者
森山　緑（Moriyama, Midori）

慶應義塾大学・アート・センター（三田）・講師（非常勤）

研究者番号：２０７７９３２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本で制作、発表されてきた美術作品のうち、剥製や、毛皮（革）、骨などを利用して造形された作品（これを「剥製美術」と名づける）を調査し、制作者への取材を行った。個々の作家がなぜ剥製を用いたのか、どのように入手したのか等の情報を得て、それらを「ヒトと動物の関係学会」等で発表した。欧米も含めて国内外の剥製美術作品を文献やインターネット資料から調査し、データベースとしてリスト化したことにより、1990年代後半から現代まで剥製美術が作られていることが判明した。それらは社会的課題に呼応するメッセージを含む例が多く、死を前提とした剥製がより強力に鑑賞者に訴える意図を示すことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
美術史学において個別の作家研究や、美術と科学の接近に関する研究は欧米を中心になされており、他の学術分野（社会学、生物学、動物学ほか）との学際的研究も行なわれている。しかし日本では、形式分析と考察を中心とした研究が多く、現代美術研究において剥製や毛皮を素材として用いた作品に関しての研究は皆無であった。本研究は、国内外の作家と剥製美術作品の網羅的調査を実施し、とりわけ日本における剥製美術作品の作家への取材を行い、制作意図や素材の入手先等について把握した。よって本研究により、日本における剥製美術の基礎情報が整備され、すでに進捗している欧米の研究成果を補完することとなった。

研究成果の概要（英文）：In this study, among the art works produced and presented in Japan, those produced and presented using taxidermy, fur (leather) and bones (this is named 'taxidermy art') were investigated and the creators were interviewed. Information was obtained on why the individual artists used taxidermy, how they obtained it, etc., and these were presented at the Society for the Study of Human-Animal Relationships and other conferences. A survey of domestic and international works of taxidermy art, including those from Europe and the USA, was conducted from literature and internet sources, and a list was compiled as a database, which revealed that taxidermy art has been produced from the late 1990s to the present day. Many of these examples contain messages that respond to social issues, and it became clear that taxidermy based on the premise of death shows a more powerful intention to appeal to the viewer.

研究分野：近現代美術史

キーワード：美術史　美学　現代美術　芸術人類学　剥製　狩猟

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、20 世紀以降現在までの造形作品を中心に従来、美術家が素材として扱ってこなかった「剥製」や「毛皮」「皮」などが用いられた作品を対象とした。洞窟壁画の例から明白なように、先史時代から現在まで人間は、多種多様な造形で動物の姿を表してきた。しかし、本来自然科学分野における標本として製作された「剥製」や「皮」そのものを用いる美術作品が 20 世紀以降、特に欧米を中心に見られるようになる。自然史博物館で教育的目的で展示されていた「剥製」が、美術館やアート・ギャラリーでの展示に登場し、我が国においても 21 世紀になると、同様の作品が多く出現してきた。しかし作家の制作動機、展示におけるキュレイターの意図、鑑賞者の受容について調査・考察する研究は、ドイツや英国を除き皆無であった。また、こうした現代美術作品の分析、考察に際しては従来の美術史学における様式論や受容論のみでは不十分であり、作家が関心を向ける社会的課題や日本、欧米での動物観を考察することが不可欠であった。

２．研究の目的

本研究では美術史において「剥製美術」を位置づけるために、人類学・自然科学史・民俗学・倫理学等の他分野の研究成果を参照しつつ、国内外の剥製美術作品の情報収集を実施しリスト化してデータベースを作成すること、作家たちの制作動機や展示におけるキュレイターの意図、鑑賞者の受容について調査・分析を行い、「剥製美術」を美術史の中に位置づけることを目的とした。

３．研究の方法

基礎的調査として国内の美術家、キュレイター、美術館を対象とし調査と取材を行った。また作品に関連する諸分野、たとえば狩猟に関してはマタギ猟師の方へのインタビューや害獣駆除に携わる自治体職員や農家にインタビューを実施した。その成果をふまえて、海外事例の調査と取材を行い、それぞれの美術家の制作動機と意図、展示・発表におけるキュレイターの意図を文献とインタビューにより収集した。また、展覧会カタログ、批評記事や論文の収集は研究実施期間中、間断なく実施しリスト化を行った。3 年間の研究全体を通じて、基礎的データベースを作成するとともに、文献・写真・動画資料等を整理し、公開を前提としたデータベース構築に向けての作業を進めた。

４．研究成果

<u>(1) 個別の美術家への取材</u>：21 世紀を代表する現代美術家である名和晃平、小谷元彦、鴻池朋子の剥製美術作品について、制作現場への訪問と美術家へのインタビューを実施し、「剥製を用いた動機」「剥製や毛皮に対する関心」「人間と動物との関係」等について美術家の思考の一側面を明らかにすることができた。制作手法については、剥製や毛皮の入手先、加工を施す場合の具体的な作業、展示方法のこだわり等から、剥製や毛皮という特異な素材が作品の強度、リアリティを増大させることが明確になった。成果として論文発表を行い、学会での発表も実施した。

<u>(2) 素材としての剥製</u>：剥製は元来、狩猟の成果物として保存するために製作されていたが、19 世紀以降に自然史博物館が成立するのに伴い、研究材料としての標本利用のために製作され

ることが多くなった。剥製製作の歴史と現状を理解することは、剥製美術作品を考察する上で本質的な課題であると認識し、文献調査および取材を実施した。欧米での剥製製作は主に狩猟文化とともに発展し、個人で剥製製作をする例も多く見受けられる。一方、標本作成の需要が高まるにつれ 19 世紀後半からプロフェッショナルな剥製師が登場し、剥製技法書も刊行された。日本には明治期に欧米から技術が導入され、標本や狩猟のための剥製需要の増大により多くの剥製製作所が設立された。1980 年代までは商業的な需要、たとえば店舗のディスプレイや服飾品にも剥製や毛皮は多用されたが、1990 年代から急速にその需要は減少し、剥製師の数も現在では最盛期の 10 分の 1 以下となっている。そのため不要になった剥製がインターネットオークションに出されるなどしており、美術家はそこから入手する例が多いことが判明した。欧米では逆に剥製の需要はそれほど減少しておらず、技術の継承も行われており、美術家自身が剥製製作をする例が日本に比較して多く見られる。この差異は、剥製美術作品の制作、鑑賞者の受け止めの分析にも大きく影響を与える点である。

(3) 社会的課題と剥製美術作品：2015 年にロンドン芸術大学のウインブルドン・スペースで開催された展覧会「ラーセンの失われた海」ではホッキョクグマの剥製を用いた展示が行われた。キュレーションを行った同大教授のエドウィナ・フィッツパトリック教授にインタビューを実施し、剥製を美術作品として提示する意図や鑑賞者の反応について知見を得ることができた。本展は同時期にパリで開催された COP21 とも呼応し、地球環境問題が遠い他人事ではなく確実に身近な事柄として意識されるよう剥製が用いられた。2001 から 2006 年にかけて英国に存在するホッキョクグマの剥製 30 体あまりを調査、追跡した美術家ユニットのスネイビヨルンスドティルとウイルソンが多様な目的・手段で剥製にされたホッキョクグマを美術作品として展示した例にも見られるが、欧米で制作される剥製美術作品には、人間が直面する社会的課題をテーマとした例が数多く存在する。気候変動や環境破壊あるいは動物の権利、福祉の阻害は人間の営為により引き起こされており、美術家は社会にメッセージを強く打ち出す意図をもって剥製を用いていることが明らかとなった。一方、日本において社会的課題はより身近な規模で意識されている。たとえば農作物の食被害のため駆除される動物であるシカの毛皮を用いたり、魚網に引っかかって死んだアザラシを用いる例である。あるいは日本に古くから存在するマタギを想起させるクマの毛皮や剥製は、命とのやり取りを象徴するかのように示されるのである。この点においてもまた、欧米と日本との差異が明らかとなる。

(4) ヒトと動物の関係：国内外の剥製美術作品を調査し分析することによって、欧米と日本での美術家の姿勢が異なることが明らかとなった。英国、ドイツでの取材調査では、すでに剥製美術研究で成果を発表しているハンブルク大学のブレント教授や前述した英国のフィッツパトリック教授らとの意見交換を行い、本研究は日本における動物観の変遷を改めて考察することで、欧米の剥製美術作品や美術家との差異および類似点を明確にできる可能性があることが判った。動物観は食文化とそれに伴う狩猟や信仰と密接に関わる。剥製美術作品の制作者、素材の加工者が持つ動物観については、歴史的変遷と現状を把握した上で分析、考察する必要がある。信仰や食文化は国内においても地域差があるため、本研究では長野県諏訪地方の調査を行ったが今後も他地域の調査を継続する必要がある。欧米で活発に研究、議論が行われている「動物学」が日本には無いため「ヒトと動物の関係学会」において本研究の成果を部分的に発表したことで、他領域の研究者から助言や情報を得ることができた。同学会誌への論文投稿や「動物観研究公開ゼミナール」での発表、また国際学会である Arts in Society での発表も行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 森山　緑	４．巻 30
２．論文標題 剥製美術（5）食から考えるヒトと動物の関係ーーダニエル・シュペリの"Eat Art"活動を中心に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 慶應義塾大学アート・センター年報／研究紀要	６．最初と最後の頁 136-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森山　緑	４．巻 29
２．論文標題 剥製美術（4）命の集積、痕跡と捕獲されたイメージ－－－－今道子の写真作品を中心に	５．発行年 2022年
３．雑誌名 慶應義塾大学アート・センター年報／研究紀要	６．最初と最後の頁 126-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森山　緑	４．巻 28
２．論文標題 剥製美術(3)　合成獣からトランス・スピーシーズへーー小谷元彦《Human Lesson 〈Dress01〉》を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 慶應義塾大学アート・センター年報／研究紀要28（2020／2021）	６．最初と最後の頁 116-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森山　緑	４．巻 25
２．論文標題 毛皮の美術 ： 実用・装飾からアート作品への変容、日欧の比較	５．発行年 2020年
３．雑誌名 動物観研究 ： ヒトと動物の関係学会誌	６．最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森山　緑	4．巻 27
2．論文標題 剥製美術（2）ーー名和晃平《PixCell》シリーズをめぐる一考察	5．発行年 2020年
3．雑誌名 慶應義塾大学アート・センター年報／研究紀要 27	6．最初と最後の頁 134-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森山　緑	4．巻 57
2．論文標題 「剥製美術」の世界 ： 西洋近現代美術におけるヒトと動物の関係	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ヒトと動物の関係学会誌	6．最初と最後の頁 64-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森山　緑	4．巻 57
2．論文標題 「動物芸術の世界」総合討論 ： 総合自由討論（特集 第26回学術大会シンポジウム 動物芸術の世界）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ヒトと動物の関係学会誌	6．最初と最後の頁 75-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森山　緑	4．巻 26
2．論文標題 毛皮の美術II ーー狩る、食べる。鴻池朋子をめぐる一考察	5．発行年 2019年
3．雑誌名 慶應義塾大学アート・センター年報／研究紀要26(2018/2019)	6．最初と最後の頁 129-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森山　緑	4．巻 25
2．論文標題 毛皮の美術ーー剥ぐ、縫う、まとう。ベレニス・オルメドをめぐる一考察	5．発行年 2018年
3．雑誌名 慶應義塾大学アート・センター年報／研究紀要25(2017/2018)	6．最初と最後の頁 128-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 森山　緑
2．発表標題 Taxidermy, Animal Fur in contemporary art in Japan: The relationship between humans and non-human animals in terms of food culture and folk beliefs
3．学会等名 Seventeenth International Conference on the Arts in Society
4．発表年 2022年

1．発表者名 森山　緑
2．発表標題 毛皮の美術 ーー 実用・装飾からアート作品への変容、日欧の比較
3．学会等名 動物観研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 森山　緑
2．発表標題 「剥製美術」の世界　西洋近現代美術におけるヒトと動物の関係
3．学会等名 ヒトと動物の関係学会（招待講演）
4．発表年 2020年

１．発表者名 森山　緑
２．発表標題 剥製美術からみるヒトと動物の関係
３．学会等名 動物観研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関